四島（しま）のかけ橋

第 46 号
平成22年１月１日
（金曜日）

発行所
北方領土返還要求運動
神奈川県民会議
〒231-8588 横浜市中区日本大通１
TEL 045-210-1111 内線3890
発行人　綾井祐一

国後島（納沙布岬から）

第25回県民大会を開催

会場は横浜情報文化センター

北方領土返還要求運動神奈川県民会議（会長　国吉一夫神奈川県議会議長、加盟団体四十三団体）は、昨年十一月三十日（月）午後六時より、横浜市中区日本大通十一「横浜情報文化センター」情文ホールにて、第二十五回北方領土返還要求運動神奈川県民大会を開催した。来場者百六十二名。

久保田政宏事務局次長（連合神奈川副事務局長）の司会による開会の言葉に続き、主催者側を代表して国吉会長の挨拶があった。また、来賓として古尾谷光男神奈川県副知事と、独立行政法人　北方領土問題対策協会（北対協）間瀬雅晴理事長から、当県民会議が昭和六十年結成以来二十五年にわたる活動への敬意と今後の運動への激励のお言葉をいただいた。

司会者による壇上の当県民会議役員の紹介の後、綾井事務局長から当県民会議の活動報告があった。続いて、昨夏、当県民会議の推薦によりビザなし交流で色丹島を訪問した県立横浜栄高等学校の吉村憲二先生と生徒二名から北方領土交流事業報告（色丹島訪問）があった。多くの写真を用いながら、吉村先生が生徒二名に質問する形式でご報告をいただいた（報告要旨別掲）。

過去にも当大会で記念講演をいただき好評を得た元NHK解説主幹　飯田健一氏による「新政権発足と日ロ関係」という時事テーマでのご講演をいただいた（講演要旨別掲）。その後、当県民会議の結成時から当会議の中心となり、また北対協の神奈川県推進委員としても尽力された故・蓮見勇氏（当県民会議前理事）に対して、北対協間瀬理事長から感謝状が贈呈された。

最後に、白石副会長（連合神奈川顧問）の閉会の言葉があり、終了した。

北方領土交流事業報告・色丹島訪問（報告要旨）

県立横浜栄高等学校　吉村憲二先生
ほか生徒二名

昨年七月三十一日から八月三日に当県民会議の推薦により北対協実施の「北方四島交流教育関係者・青少年訪問事業（色丹島）」に参加した、県立横浜栄高等学校の吉村憲二先生と生徒二名から色丹島訪問のご報告をいただいた。報告形式は、吉村先生が写真を紹介しながら生徒二名に対してインタビューするもの。

【以下報告要旨】

○先生　●生徒

○北方領土に関して今までに知っていたことは？

●日本の最北端にあること、四島の名前は知っていた。

●かつて日本の領土だったものが、戦争の時からソ連に占領されてしまっていることは、小学生の頃から知っていた。

○実際に行ってみた色丹島の印象は？

●空気は澄み、緑がきれいで、動物も多く、自然が豊かだった。

●八月であるのに寒かった。

●ゴミや野犬などが多く、環境衛生が悪いように思えた。

●道路が舗装されていないことに驚いた。

○色丹島のメインストリートも未舗装で、訪問二日目は雨でぬかるみになった。

私はオフロード車だったが、生徒はバスだったので相当揺られたようだ。ただし、現地の人は時速七十㎞くらいで相当飛ばして運転していた。

○色丹島の住民たちに対する印象は？

●険悪な雰囲気かと思っていたが、行ってみたら温かく迎えてくれた。

●みんな陽気で親切だった。

●交流自体は和やかで温かい雰囲気で楽しかったが、領土問題の話題になると表情も変わり、いい内容は聞けなかった。

○色丹島の同世代の中高生に対する印象は？

●領土問題など微妙な問題は言葉にしにくい感じだったが、女の子はファッションに非常に興味があり、男の子はシャイで、私たちと同じだと感じた。

○色丹島の彼らは、領土交渉の最前線にあるが、日本語を勉強している子もおり、こういう交流事業では大活躍しているそうだ。

○今後、日本人とロシア人が共存する場合、どのような課題があるか？

●言語が異なることは何とかなるだろうが、法律面での整備が必要となる。また、現在は緑豊かな環境だが、自然環境をどう守っていくか。日本に返還されると自然が壊されるかもしれないが、環境衛生は良くなるだろう。

●お互いの理解には時間がかかるだろう。

○今後の返還交渉に望むことは？

●返還要求の主張ばかりではなく、もっとお互いに歩み寄る方が良いのではないか。

●これまでのような対立的な交渉ではなく、もっと友好的に話し合いをして、現地の人たちの意見を取り入れながら進めていくべき。

○色丹島訪問の体験をどのように伝えるべきか

●この体験を今後生かす手だてとしては、こういう発表の場がもっと欲しい。若い人に関心を持ってもらいたい。

○クラスで話しても、「ふ～ん」で終わってしまい無関心の生徒もいる現状である。

●多くの人に分かってもらうためには、様々な場で発表し、考えてもらえる機会が増えると良い。

北方領土はこんなに大きい

択捉島	3,184平方キロ
国後島	1,499平方キロ
沖縄本島	1,199平方キロ
佐渡島	854平方キロ
奄美大島	712平方キロ
淡路島	591平方キロ

灯台

昨年末、NHKスペシャルドラマで放映された司馬遼太郎の「坂の上の雲」を観た。

私は、若い頃に司馬遼太郎の書籍を読んだのだが、幕末から明治維新にかけての激動の日本の姿と、近頃の混迷している日本の姿とが、とても似ているように思う。

「坂の上の雲」は、日露戦争を描いた本であるが、当時は世界中が自国の繁栄を目指し、領土の侵略を繰り返すという時代であった。その日露戦争終戦後の一九〇五年、アメリカ・ニューハンプシャー州ポーツマスで、日露両国が条約を批准したが、司馬遼太郎の記述によると、ロシア全権大使・ウイッテは、日本の全権大使・小村寿太郎との約束を破り、マスコミを利用して交渉を有利に運んだ、というくだりがある。

政治交渉は、自国に有利に運ぶことが原則であり、難しい面があると思うが、ボールを投げるだけでなく、打ち返してもらって、そのボールをどのように捌くか、そこが政治手腕の見せ処ではないかと思う。

先の大戦後、日本は、欧米に追いつけ、追い越せで、特にアメリカの技術を勉強し、経済的な発展を達成した。しかし、今やグローバルな社会になり、特にアジアの時代、そして開発途上国に世界が注目している時代となっているように思う。

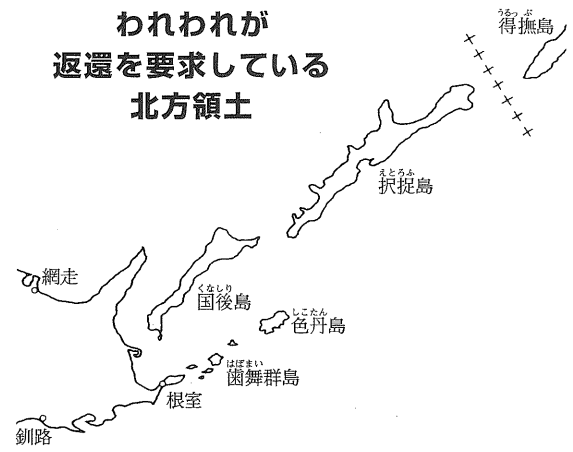
これからの若い世代の人たちには、領土問題についても勉強し、このグローバル世界の中で、ロシアをはじめ世界の人々と友好関係を築いていっていただきたいと思う。（綾井）

四島（しま）返還　日ロの明日を　ひらく鍵

平成21年度北方領土返還要求運動に関する標語＜最優秀賞＞　松戸市　橋本樹幸氏

「新政権発足と日ロ関係」（講演要旨）

元NHK解説主幹　飯田健一氏



鳩山政権が誕生した後、日ロ間では首脳会談も行われ、形の上では政権交代後も順調に対話がスタートした。鳩山首相就任直後の電話会談、九月の国連総会（NY）の際の短時間の会談についで、十一月十五日、シンガポールでのAPEC（アジア太平洋経済協力会議）首脳会議の際に日ロ首脳会談が行われた。ただ、会談の中身、特に領土交渉という点から見れば、予想通り特別の進展はなかった。鳩山・メドベージェフ両首脳は、「平和条約交渉は従来の冷戦時代の発想に捉われずに促進しよう。首脳同士更に緊密に協議しよう」と、原則合意はしたが、それ以上の内容はなかった。

日本は政権交代で、「政治主導・脱官僚」など内政面の大変動に加え、米軍再編、沖縄など「日米関係」再構築という大きな外交課題に直面。ロシア側も、〇八年五月にメドベージェフ政権が発足して一年半だが、日本の目まぐるしい政権交代で、歴史課題の「領土問題」に腰を据えて交渉できる状況になかった。日ロ外交の再始動には、もう少し時間がかかろう。

しかし、それにもかかわらず、当面の日ロ・領土交渉に重要な影響を与えるロシア側の基本姿勢は、かなりハッキリ見えてきている。いわゆる「プーチン路線」を、メドベージェフ現政権も大筋では継承していくという方向だ。

プーチン路線と新政権

「プーチン路線」とは、プーチン前大統領が八年間の政権時代に推進したロシア内外政策の基本路線。「強いロシアの復活」を目指し、豊富な資源をテコに経済再建、「国益最優先」の外交を推進する。そのためには権力の力で強引に国内秩序を確立する。プーチン前大統領は八年の任期で、この「プーチン路線」の方向をほぼ確立、ロシア国民も強い支持を与えた。

ロシアは二〇〇八年五月、「任期八年」までという憲法の規定に従って大統領が交代、プーチン氏の側近中の側近、四十二歳のメドベージェフ氏に引き継がれたが、新政権発足当初から、「実権は依然プーチンに」、「プーチンの院政」というのが一般的な評価だ。これについては、メドベージェフ大統領と実力者プーチン氏との間に政策理念や政治手法に微妙な違いがあるのではという指摘や、今後の指導体制をめぐってメドベージェフ大統領は任期一杯、つまり二期八年続けるのか、それとも一期四年で退陣して再びプーチン大統領となるのか、など見方は分かれるが、大筋としてはプーチンのロシア政治における影響力は依然として強大であり、少なくとも現在のメドベージェフ政権の基本政策は「プーチン路線」を踏襲・継続と見て良いと考える。

「強いロシアの復活」を目指す「プーチン路線」は、当然、国家主権の支えとなる「国境・領土」に対する考え方にも反映。「第二次大戦の結果生まれたロシアの領土・国境線の現状を堅持する」という立場だ。ロシアはプーチン政権後半から、「北方領土四島は、第二次大戦で日本が無条件降伏の結果、その主権は旧ソ連に移り、現ロシアが継承。四島へのロシアの主権は国際法上確定したもの。」と強調している。また近年、択捉・国後に巨額資本を投じ開発を進め、四島支配の既成事実化を急いでいるようだ。九二年以来続いている「ビザなし交流」事業についても、この七月、ロシア上院が事業停止を求める声明を採択するなど、事業継続にブレーキをかけるような動きも見せている。先月（〇九年十月）も、前原誠司北方対策担当大臣が巡視船で洋上から北方領土を視察したが、この時、感想として「北方領土は国際法上も日本固有の領土。終戦の混乱の中で旧ソ連が不法占拠したもの。この事実は主張し続ければ」と語ると、二日後にはロシア外務省がこれに反論するなど、日本側の動きにもいちいち神経を尖らす姿勢を強めている。

北方領土問題への反応

すでに半世紀を超えた領土交渉の膠着状態に加え、こうした近年のロシア側の強硬姿勢（ロシア国内に対外強硬の「プーチン路線」を支持するナショナリズム・大国主義の高まり）という情勢から、日本側の一部には交渉の今後への悲観論・懐疑論が生まれ、そこから様々な譲歩案・妥協案が浮上している。一九五六年共同宣言が「将来平和条約締結の際、歯舞色丹二島を返還する」とあることから、「まず取りあえず二島」、「二島と二島を区別して交渉」の「並行論」、さらには「面積で割って日ロ半分ずつ」などという日ロの歴史も無視した乱暴な議論だ。

ロシア側はこうした日本の空気を見逃さない。最近しきりに「五六年の共同宣言」の存在を強調するようになった。〇九年七月のイタリアの主要国首脳会議（サミット）後の記者会見で、メドベージェフ大統領自身が「ロシアは五六年の日ソ共同宣言が唯一法的根拠のある文書と考えており、日ロ交渉はこの文書に基づいて進めるべきだ」と述べた。狙いは「歯舞色丹で決着」だ。シンガポールの日ロ首脳会談で鳩山首相が「領土解決策として歯舞色丹二島返還というのでは、日本の政府も国民もどうしても理解できない。それを超えた独創的なアプローチが必要だ」とズバリ主張したのは、そうした背景があるからだ。

最近の日ロ関係で気になる動きと関係がある。先月（〇九年十月）、前原北方対策担当大臣の北方領土視察の際の発言に、ロシア政府が早速反論したことを紹介したが、実は日本でも前原発言を批判する小論文が今月発行の月刊誌に掲載された。筆者は元外務省局長・オランダ大使の東郷和彦氏。同氏は論文で「前原発言は、日ロ交渉が今どういう段階にあるのか分かっていない発言。これから重要な領土交渉に入ろうというのに、政府当局者がわざわざ日本固有の領土といった日本の基本的立場など口にすべきか」と批判している。ロシア外務省と同じことを主張しているのだ。つまり、「デリケートな交渉を前に相手国を刺激するような事は言うな」ということだ。そうだろうか。領土交渉というのは、国家間の歴史を背負った交渉であって、お互い歴史的事実の正しい認識から出発すべきものだ。相手の顔色をうかがって、自国の基本的な立場や国際法上の正義について口を噤んだり、相手の強硬姿勢に気押されて次々に譲歩案・妥協案を繰り出すのは、むしろ日本側の立場・意図に対するロシア側の誤解を招くことになる。

北方領土問題への姿勢

領土交渉に拙速・焦りは禁物。これは国家主権・孫子の世代に関わる問題。国際法の正義、歴史の客観的事実に基づいて解決すべきものだ。北方領土問題で今私たちが立ち返るべき原点は、九三年に日ロ政府が合意した「東京宣言」だ。つまり「日ロの問題は四つの島だと、島名を明記して確認、これらの帰属を決めた上で平和条約を締結する」とした同宣言に立ち返るべきである。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

飯田健一氏　プロフィール

昭和三十六年NHK入局後、NHKモスクワ支局長、NHKワシントン支局長、NHK解説主幹を歴任。元防衛大学校　教授、前国士舘大学大学院　政治学研究科　客員教授。

2月7日（日）は「北方領土の日」

毎年、二月七日は「北方領土の日」です。

これは、北方領土問題に対する国民の関心と理解をさらに深め、全国的な北方領土返還運動の一層の推進を図るため、昭和五十六年一月六日の閣議了解により定められました。

一八五五年の二月七日（旧暦では安政元年十二月二十一日）、伊豆の下田において日魯通好条約が調印されました。この条約で日ロ両国の国境が平和裏に定められ、北方四島が日本の領土として初めて国際的に明確にされたのです。そうした経緯を踏まえて、二月七日が「北方領土の日」として決定されました。

歯舞（はぼまい）群島、色丹（しこたん）島、国後（くなしり）島、択捉（えとろふ）島の北方四島は、我が国の固有の領土です。しかし、北方四島は先の大戦が終戦となった後に、旧ソ連軍によって占領され、半世紀以上を経過した今日でも、その返還はなされていません。

北方四島の返還を現実のものにするためには、国民の皆さんの関心を一層深め、世論を団結させて粘り強く返還要求運動を展開させていく必要があります。

本年も二月七日（日）、東京都千代田区の九段会館で、「北方領土返還要求全国大会」が開催されます。

「北方領土パネル展2010 IN かながわ」開催

■日　時　平成22年2月25日（木）12：00～17：00
〃　26日（金）9：00～17：00
〃　27日（土）9：00～15：00
※全日入場無料

■場　所　かながわ県民センター1F　展示場
■内　容　B2サイズパネル41点他を展示・ビデオ上映・北方領土返還の署名等
■主　催　北方領土返還要求運動神奈川県民会議

編集後記

◇この県民大会で前神奈川県推進委員の故蓮見勇さんが北対協から感謝状を受けた、この「四島のかけ橋」も蓮見さんが執筆をはじめて四十六号を迎える。

◇二月七日は全国大会です、多くの県民の皆様に参加をお願いします。（綾井）